

兵庫県の甲虫類 (1)

(兵庫県甲虫相資料・127)

高 橋 寿 郎

はじめに：兵庫県に棲息している甲虫類 (Coleoptera) はどの位いるだろうか調べて見たい。そして出来ればそれ等の分布状況、生態などがわからないものか等々を考へて微力ながら続けてきて48年がたった。自分の浅学に加えて努力の足りなさもさることながら余りに大きな目標であることに今更ながら驚くと共に身の程を知らない目的を立てた吾が身に呆れ果てている。

兵庫県と云っても結構広い地域であり筆者自身の調査回数も一例を1964～1980年 (県下の調査は1935年からやっているが1964年以前は詳しい記録を残していないので省いた) にかけてを眺めて見ても県下88地点、581回の調査と云うように可成りの調査をやったつもりであるが之もほとんど単独の調査で多人数の調査ではなくやはり限度があったと考えられる。さらに県下各地での記録を出来るだけ収録して見たのであるがこちらも県下に満遍なく調査がおこなわれているわけでもなく調査が全くおこなわれていない地域が多く存在しているし、調査者が甲虫の全部の種に就いて力を注いで調べられたわけではなく人気のあるグループは割合調査が出来ているようだが全く見向きもされないグループも大変多い。これは筆者自身の経験でも好きなグループにはどうしても力が入りもっと全般的にと考えても全く採集が出来ていないグループが多くある。

兵庫県産の甲虫類は何種類か？これが大変な難問題である。日本産の甲虫類は何種類か？これも現在ははっきりしたまとめと云うものは無い。尤も年々新知見が現れてくるから何処でその数を押えるかにも問題はあつた。一応中根猛彦博士に従って8,000種近く将来10,000種をこすであろうと云うことにしておく (1963)。

兵庫県産の甲虫の方も目下調査を継続中であり年々新しく記録される種もあれば夫々専門家に同定を御願ひしている種もあるし、また再検討、再同定による整理もあるのでこちらもどの時点で押えるかと云うことは問題である。従って1980年末の時点で一応区切をつけたものを見ると兵庫県産の甲虫類としては105科、2,851種が各種毎に産地別に筆者の手許で整理出来ている。

単純に比較すれば日本産の半数にも満たないと云うことである。だが之は前にも記した様に県下の未調査地のまだ多いこと調査人員の少いこと (専門家による調査が少いこと)、調査方法が不十分であること等々を眺めて見た場合もっと種類数は増加するであろう (現に年々何

種類かは増えている)。少くとも日本産の半分近く3,500種位は間違なくいるだろうと考えて調査を続けているのが現状である。併しながら実際の兵庫県の甲虫相を発表出来る段階にはまだまだでその片鱗さえわかっていないと云うのが現実だとは考えられるが折角今迄の集積をそのままにしておくのも残念なので大変不十分なもので申し訳無いのだが現時点での兵庫県産の概略でも知って頂く意味でまとめられるグループごとに連続して発表させて頂き度いと思ふ。

今回はホソホタルモドキ、カツオブシムシの両科を報告させて頂く。

末文で申しわけないが一部標本の同定を御願ひした愛媛大学 久松定成氏に厚く御礼申しあげる。

Family Ometheidae ホソホタルモドキ科

原色昆虫大図鑑で Drilidae ホタルモドキ科として図説された科。中根博士によると真のホタルモドキ科 Drilidae は日本に産しないとのこと (1969, 1972)。現在兵庫県からは2種を記録出来たが日本産は中根博士によると3種となっている (1972)。この科に就いては中根博士が Drilidae として分類学的記述をされた論文がある (Mushi, 21巻, 3号, p. 29—31, 1950)。それと大図鑑の図説でその同定は出来るものと考えている。

1. *Drilonius striatulus* Kiesenwetter

ホソホタルモドキ

本種は Kiesenwetter が “Die Malacodermen Japans nach dem Ergebnisse der Sammlungen des Herrn G. Lewis während der Jahre 1869—1871” (Berl. Ent. Zeits., 18 : 241—288, 1874) の中で新属 *Drilonius* を創設, “Hiogo, Nagasaki” を産地に新種記載された種である (p. 282—283)。

さらに Lewis は “On the Dascillidae and Malacoderm Coleoptera of Japan” (Ann. Mag. Nat. Hist. 6, xvi : 98—122, pl. vi, 1895) なる論文の中で本種の図を示しておられる (pl. vi, f. 5) が記述が全くない。分布は一応日本の本州、四国、九州だけとなっている。

兵庫県下では可成り広い地域で見られるのでそう少い種ではないように思われる。山地の草や葉上更に花上にも見られる。幼虫は肉食性と考えられるが詳しい生態に

就いての報告がない。

産地：三原郡論鶴羽山〔久松, 1974〕*、南淡町煙島〔登日, 1982〕。川辺郡猪名川町木津上〔仲田, 1978, 1982〕。Hiogo〔Kiesenwetter, 1874〕。神戸市烏原〔lex., 10-v-1956〕。飾磨郡雪彦山〔lex., 14-vii-1957〕。宍粟郡音水〔lex., 13-vii-1958, 3exs., 20-vii-1959, S. Hisamatsu det., lex., 16-vii-1972〕。水谷〔2exs., 17-vii-1981〕。多紀郡篠山町籠坊〔仲田, 1982〕。氷上郡〔山本, 1958〕。城崎郡三川山〔高橋, 1978〕。美方郡扇の山〔辻, 岩田, 1972〕。

2. *Drilonius osawai* Nakane

ムネアカソノホタルモドキ

本種は中根博士によって木曾駒ヶ嶽, 和歌山県高野山, 伊予皿ヶ嶺産の標本で記載されたもので (Mushi, 21巻, 3号, p. 30-31, 1950), 種名 *osawai* は初めての採集者大澤省三氏に献名されたものである。分布は本州と四国のみである。

兵庫県下では氷の山のみしか採集出来ていないが北部山岳地域一帯にいるものと考えている。

産地：養父郡氷の山〔lex., 27-vii-1956〕。

Family Dermestidae カツオブシムシ科

本科のものに就いての総合的な分類研究は大林延夫氏によっておこなわれその第一報の発表をされたのが1977年である (昆虫, Vol. 45, No. 3, p.349-359)。それ以後の研究はまだ公表されていないと思うがこの第一報で日本におけるこの科の研究史の概説もされている。氏によるとこの科の世界産は約900種で日本には約30種を産するとなっている。

良く知られているように幼虫, 成虫共に動物や植物質を食し, 皮革, 角, 毛, 羊毛, 獣脂, 乾肉, チーズ, 昆虫標本, 穀類, 生産物等の害虫として有名であるばかりでなく多くの種類は花やその他のものに集来し比較的私達の身近に多くいる虫であるようだが案外と県下での調査が出来ていないグループの1つである。より一層の調査をしなくてはならないと考えている。

1. *Dermestes ater* Degeer トビカツオブシムシ

干物, 剥製, 鯨節などに多くいる。分布も広い。生態に就いては横山博士の報文がある (蠶業試験場報告, 第7巻, 第2号, 1925)。

産地：三原郡福良〔久松, 1973〕。川西市大和〔仲田, 1978, 1982〕。川辺郡猪名川町日生ニュータウン〔仲田, 1978, 1982〕。神戸市烏原〔lex., 7-v-1953, lex., 25

-v-1961, lex., 27-vi-1961, lex., 29-ix-1961, lex., 17-i-1969, lex., 1-ix-1972, lex., 6-vi-1978〕。加西市畑〔lex., 27-vii-1974〕。氷上郡〔山本, 1958〕。出石郡出石町小人〔高橋, 1963〕。豊岡市下陰〔高橋, 1975〕。

2. *Dermestes maculatus* Degeer

ハラジロカツオブシムシ

干魚, 毛皮, 蚕繭等を害する種として知られていて広く産すると思われるが案外記録も無く筆者も採集したことがない。野外での採集と云うのは案外難しいのではないだろうか。仲田氏は能勢川の川原で転っていた犬の死体より得たとある。

産地：川西市畦野能勢川川原, 大和〔仲田, 1979, 1982〕。氷上郡〔山本, 1958〕。

3. *Attagenus unicolor japonicus* Reitter

ヒメカツオブシムシ

毛織物, 毛皮, 蚕繭などを害する。広く産するようである。生態に就いては横山博士の報文がある (蠶業試験場報告, 第8巻, 第6号, 1932)。

産地：川西市大和〔仲田, 1978, 1982〕。神戸市烏原〔lex., 6-vi-1961, lex., 18-vii-1972〕, 鶴越 (3exs., 24-v-1968)。相生市三濃山〔lex., 12-v-1974〕。氷上郡〔山本, 1958〕。出石郡出石町〔高橋, 1963〕。豊岡市内〔高橋, 1978〕。

4. *Attagenus pellio* Linné

シラホシヒメカツオブシムシ

成虫は穀類をふくむかわいた植物質のものを食べるが幼虫は動物質のものを好んで食べると。案外と県下での記録が無い。調査不充分のようである。

産地：神戸市烏原〔lex., 26-vi-1982〕。相生市三濃山〔lex., 12-v-1974〕。養父郡氷の山〔lex., 6-v-1972, K. Tsuji leg〕。

5. *Thaumaglossa hilleri* Reitter

ヒレルケブカカツオブシムシ

本種も案外記録が無い。もっと広く分布していそうである。

産地：神戸市烏原〔lex., 30-v-1971, lex., 28-v-1972, lex., 1-v-1977, lex., 10-v-1982, lex., 27-v-1982, lex., 10-vi-1982〕, 山の街〔lex., 29-iv-1959〕, 太山寺〔lex., 29-iv-1973, S. Hisamatsu det.〕。豊岡市愛宕山〔高橋, 1975〕。

* 産地の所で〔 〕の中のものは文献からの引用。()の中のものは筆者所有標本。

6. *Thaumaglossa rufocapillata* Redtenbacher

カマキリタマゴカツオブシムシ

松村松年, 横山桐郎両博士が新属, 新種 *Orphiloides ovivorus* として記載された種 (Ins. Mats., II, 3: 130-132, 1928)(オオカマキリ, コカマキリ, ハラビロカマキリ及びナカムラオニグムの卵に寄生し, 日本の北海道, 本州, 四国, 九州, 台湾に普通に産するとされている)がこの種にあたる。尚本種の生活史に就いては石井五郎氏の報文がある(蠶糸試験場報告, 9巻, 3号, p.151-165, 1937)。桐谷圭治氏は産卵習性に就いての報告を発表している(生態昆虫, 7巻, 8号, p.111-116, 1959)。余り県下での記録が無いが之は調査が不充分のためと考えられる。

産地: 川西市大和, 笹部〔仲田, 1978, 1982〕。神戸市烏原 (lex., 1979, lex., 5-v1-1980, lex., 21-v1-1982, lex., 3-ix-1982)。

7. *Trogoderma varium* Matsumura

et Yokoyama アカマダラカツオブシムシ

蚕繭等害し絹織物などを加害するが動物標本が害されることもある。生態に就いては石井五郎氏の報文がある(蠶糸試験場報告, 9巻, 3号, p.125-150, pl. iv, v, 1937)。筆者県下未採集である。

産地: 氷上郡〔山本, 1958〕。出石郡出石町松ケ枝〔高橋, 1963〕。

8. *Anthrenus museorum* Linné

シモフリマルカツオブシムシ

花上に成虫は得られる。幼虫は乾燥動物標本などを害する。分布も世界各地に広い。県下にも広く見られる。

産地: 洲本市安乎町〔堀田, 1978〕, 川西市見野, 大和〔仲田, 1978, 1982〕。神戸市六甲山 (2exs., 4-v11-1965), 烏原 (lex., 28-v-1972), 山の街 (lex., 1-v1-1958)。多可郡白山 (lex., 3-v-1973, lex., 27-v-1973)。朝来郡須留ヶ峯 (lex., 9-v1-1975, M. Yumaleg)。宍粟郡音水 (lex., 11-v1-1972), 坂の谷 (3exs., 3-v1-1973)。

9. *Anthrenus pinpinellae* Fabricius

シラオビマルカツオブシムシ

成虫は花上にみられ幼虫は乾燥した動物質を好み標本などが害を受けることがある。通常は年1回の発生。秋に成虫になったものは雀などの巣で越冬すること。広く分布していそうである。

産地: 津名郡五色町下塚〔堀田, 1978〕川西市〔仲田, 1970〕, 笹部〔仲田, 1978, 1982〕。氷上郡〔山本, 1958〕。神戸市烏原 (2exs., 4-v-1983, 4exs., 5-v-1983)。

10. *Anthrenus verbasci* Linné

ヒメマルカツオブシムシ

本種も花上にみられる。幼虫は乾燥動物質を食し標本, 毛織物等の大害虫として知られている。県下にも広く普通に産する。生態に就いては横山博士の報文がある(蠶業試験場報告, 第7巻, 第9号, 1929)。

産地: 川辺郡猪名川町上阿古谷〔仲田, 1982〕。川西市大和, 笹部〔仲田, 1978, 1982〕。神戸市烏原 (5exs., 20-v-1962, lex., 27-iv-1975, lex., 12-v-1980, 4exs., 17-v-1980, 4exs., 19-v-1980, 3exs., 22-v-1980, 2exs., 15-v-1981, lex., 23-v-1981, lex., 7-v1-1981, lex., 11-v1-1981, lex., 10-v-1982, lex., 13-v-1982, lex., 17-v-1982, 2exs., 18-v-1982, lex., 19-v-1982, lex., 24-v-1982, lex., 21-v1-1982), 山の街 (lex., 23-v-1970)。多可郡白山 (lex., 27-v-1973, lex., 9-v-1973), 三谷 (lex., 8-v1-1975)。飾磨郡家島 (lex., 26-v-1978)。神崎郡笠形山 (3exs., 12-v1-1975)。揖保郡鶏籠山 (lex., 27-v-1970)。氷上郡〔山本, 1958〕。出石郡出石町松ケ枝〔高橋, 1963〕。城崎郡城崎 (2exs., 17-v-1970), 三川山〔高橋, 1975〕。

11. *Orphinus japonicus* Arrow

ベニモンカツオブシムシ

原産地は本州の“Fukushima, Shinkano, Mimasaka”産であり Arrow によって記載された種である (Ann. Mag. Nat. Hist. viii, 15: 438, 1915)。本種に就いては久松定成氏が詳しい図説をされ (あげは, No 8, p.5, 1960)。更に中根博士の大図鑑でのカラー図説もある (1963)。従って一般に良く知られている種と思われる。分布も日本特産種とのことであるが北海道, 本州, 四国, 九州, トカラ中之島, 対馬と広く知られている。

ところが兵庫県下からは不思議と今迄全く記録の無かった種である。筆者は可成り前に採集した音水, 氷の山産のものを久松定成氏に同定して頂いていたが発表はしていなかった。最近神戸市内でも枯枝や叩網で受けると結構入ってくるのがわかった。生活史などは不明であるが案外と多くいる種なのではないかと思われる。それと上翅に肩部後方に一對の橙黄色の斑紋を有するが個体によっては他の黒色部が全体に黄褐色がかかったもの更には上翅端近くの左右に橙黄色の斑紋をもったものも結構いるようである (丁度上翅に4橙黄色紋をもったようなもの)。もう少々数を見なければいけないが変種のようにも思われる。

産地: 神戸市烏原 (1♀, 15-v1-1982, 1♀, 23-v11-1982, 1♀, 25-v11-1982, 1♀, 30-v11-1982, 上翅紋が4紋のもの 1♀, 20-v11-1982, 1♀, 27-v11-1982,

1♀, 7—viii—1982, 1♀, 10—viii—1982)。宍粟郡音水 (1♀, 13—vii—1958, S. Hisamatsu det.)。養父郡氷の山 (1♂, 27—vii—1956, 1♂, 27—vii—1957. S. Hisamatsu det.)。

12. *Trinodes rufescens* Reitter

チビケカツオブシムシ

屋内に多く小動物の死体、脱皮殻などを食するとのこと。広く分布していそうである。

広瀬幸一氏は蜜蜂の蜜蝋を食することを記録しておられる (昆虫世界, 39巻, p. 363—364, 1935)。生活史として黒沢次男氏の報文がある (蠶業試験場報告, 9巻, 3号, p. 185—204, pl, 7, 8, 1937) (この中で蠶繭, 生活, 乾燥せる蠶蛹及び蠶蛾をも加害すると報告されている) (上記2報文とも学名は *T. hirtus* Fabricius となっている)。

産地: 川西市 (仲田, 1970), 大和 (仲田, 1978, 1982)。神戸市山の街 (lex., 7—vi—1959, S. Hisamatsu det.), 藍那 (lex., 29—v—1978)。飾磨郡雪彦山 (lex., 14—vii—1957, S. Hisamatsu det.)。宍粟郡音水 (lex., 25—vi—1972)。氷上郡 (山本, 1958)。

以上兵庫県産カツオブシムシ類として12種の分布を報告した。御覧のごとく大変不十分だと思う。今後のより一層の調査を継続したい。

(May · 1983)